



Title	コリマ・ユカギール語における否定と他動性
Author(s)	長崎, 郁
Citation	北方言語研究, 5, 15-24
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58324
Type	departmental bulletin paper
File Information	03Nagasaki_tokushu.pdf



[特集 否定構造]

コリマ・ユカギール語における否定と他動性*

長 崎 郁
(国立国語研究所)

1 はじめに

コリマ・ユカギール語では、接語 *el=* が否定の標識としてさまざまなタイプの否定構造で用いられる¹。否定接語は通常は動詞の直前に現れるが、他の文構成素の直前に現れることもある。この言語の否定構造に見られる特筆すべき現象は、平叙文の肯否における文法範疇上の非対称性であり、肯定文で動詞の人称語尾によって示される自動詞と他動詞の対立が、否定文で解消される。本稿では、まず第2節で否定接語の位置に注目しながら否定構造の概略を述べる。次に第3節で平叙文の否定における自他の対立の解消について論じる。第4節では推量接辞の添加の際にも、否定と同様の自他の対立の解消が生じることがあること、さらに否定接語と推量接辞が共起する場合には、前者による影響が後者による影響に優先されることを示す。最後に第5節で本稿での議論をまとめる。

2 否定構造の概略

2.1 動詞述語文の否定

コリマ・ユカギール語の否定接語 *el=* は平叙文・命令文の違い、主節・従属節の違いなどに関わらず、動詞述語文の否定で一貫して用いられる。以下の (1) は平叙文（主節）の否定、(2) は3人称への否定命令（主節）、(3) は条件節（従属節）の否定の例である。これらの例に見るように、否定接語 *el=* の標準的な生起位置は動詞の直前である。

- (1) *met qon-din l'e-lle el=qon-d'e.*
1SG 行く-CVB.PURP いる-CVB.SEQ NEG=行く-IND.INTR.1SG
「わたしは行こうとしていたが、行かなかった」

* 本稿は日本言語学会第149回大会ワークショップ「北東ユーラシア諸言語における否定構造」での口頭発表に加筆・修正したものである。本研究を進めるにあたっては、科学研究費補助金基盤研究(B)「北東ユーラシア少数言語の電子アーカイブ環境構築とドキュメンテーション研究」(課題番号: 23401025、研究代表者: 長崎郁)および基盤研究(C)「消滅の危機に瀕する古アジア諸語の再活性化のための辞書編纂と語彙データベース構築」(課題番号: 25370453、研究代表者: 永山ゆかり)による助成を受けた。

¹ 本稿で用いるデータには、(1) ロシア、マガダン州セイムチャン村およびコリムスコエ村、サハ共和国ネレムノエ村での筆者自身の調査で得られた資料、(2) 刊行されたテキスト資料 (Nikolaeva 1989(I, II)、Nikolaeva 1997) が含まれる。(2) からの引用の際には出典を示す。引用におけるグロスには筆者によるものである。音素目録は次のとおり: /p, t, ʃ, tʃ, k, q, b, d, ʒ, g, ʁ, m, n, ŋ, l, ʎ, w, j, i, e, a, o, u, ɵ/. 表記は基本的に音素表記を用いるが、ロシア語からの借用語にはキリル文字をラテン文字に転写した表記を用いることもある。Nikolaeva (1989) の原文のキリル文字はローマ字に転写した。また、Nikolaeva (1997) で非狭口母音の表記に用いられている /a/ はそのまま残した。

- (2) *tit-kele nilgi el=uufaa-gen.*

2PL-ACC 誰も NEG=触る-IMP.3

「お前たちを誰も邪魔してはならない」(Nikolaeva 1989(I): 46)

- (3) *kej-ŋit el=kej-ŋit met mid'-u-t.*

くれる-CVB.COND NEG=くれる-CVB.COND 1SG とる-E-FUT:IND.TR.1SG

「(おまえたちが牛を) くれようとくれまいと、わたしは手に入れる」

否定が肯定に否定接語を加えるだけでは成り立たず、肯否が非対称 (Payne 1985 ; Miestamo 2005, 2007) となるのは、平叙文と 2 人称への命令文の 2 つの場合である。平叙文の否定については第 3 節で扱う。2 人称への命令文の場合、(4a)と(4b) に見るように、(肯定の) 命令文 (*-k~∅*) と否定命令文 (*-lek*) では、異なる人称語尾が用いられる。否定命令文では否定が接語と人称語尾によって二重に示されているとも言える。

- (4) a. *pulun-die, kimd'ef, t'uul'd'ii pundu-k mit-in.*

老人-DIM お願いだ 昔話 話す-IMP.2 1PL-DAT

「おじいさん、お願いだ、わたしたちに昔話を語ってくれ」

- b. *met tet-ul ket'ii-l-ool el=pundu-lek.*

1SG 2SG-ACC 運んでくる-E-NMLZ NEG=話す-PROH

「わたしがお前を連れてきたことを話してはならない」

2.2 存在文の否定

存在動詞 *l'e-* 「いる・ある」に対する不在の動詞は *əjl'e-* 「いない・ない」である。つまり、存在と不在は補充法によって表される。ただし、不在動詞 *əjl'e-* は否定接語と存在動詞の融合により成立したのではないかと考えられる。

- (5) a. *kind'e pod'erqo aaj l'e-t-i.*

月 光 も ある-FUT-IND.INTR.3

「月の光もあるだろう」(Nikolaeva 1989(I): 22)

- b. ... *qamun=de pod'erqo-ge əjl'e-t-i.*

いくつ=IDEF 日-LOC いない-FUT-IND.INTR.3

「(かれは) 何日間か留守にするだろう」

2.3 コピュラ文・名詞述語文の否定

コリマ・ユカギール語では、名詞述語文は主語が 3 人称且つ述語に時制などの文法範疇を明示的に示す必要のない場合に用いられ、それ以外の場合にはコピュラ文が用いられる。(6a) は主語が 1 人称のコピュラ文、(7a) は主語が 3 人称の名詞述語文である。(6a) に対応する否定文では、否定接語を補語の前に置いても、コピュラ動詞の前に置いてもよい (6b、c)。また、(7a) に対応する否定文では、否定接語を名詞述語の前に置いても、コピュラ動

詞を用いその前に否定接語を置いてもよい (7b、c)。このように、コピュラ文における否定接語の生起位置は一定ではない²。

- (6) a. *met odul oo-d'e.*
 1SG ユカギール COP-IND.INTR.1SG
 「わたしはユカギールだ」
- b. *met el=odul oo-d'e.*
 1SG NEG=ユカギール COP-IND.INTR.1SG
- c. *met odul el=oo-d'e.*
 1SG ユカギール NEG=COP-IND.INTR.1SG
 「わたしはユカギールではない」

- (7) a. *tudel odul-ek.*
 3SG ユカギール-PRED
 「かれはユカギールだ」
- b. *tudel el=odul-ek.*
 3SG NEG=ユカギール-PRED
- c. *tudel odul el=oo.*
 3SG ユカギール NEG=COP
 「かれはユカギールではない」

2.4 否定代名詞・否定副詞

否定代名詞・否定副詞は疑問代名詞・疑問副詞に接語 *n'e=* を付けて作られる。この *n'e=* は、ロシア語で同様の機能を果たす接頭辞 *ni-* の借用である可能性が考えられる。ただし、疑問代名詞 *kin* 「誰」に対する否定代名詞は補充法による *nilgi* である。否定代名詞・否定副詞は否定接語または非存在の動詞と共起し、全部否定を表す。2.1 節の(2)、第3 節の(13b)も参照されたい。

- (8) *met n'e=qanin oozii el=juo-nu-je.*
 1SG CLT=いつ 水 NEG=見る-IPFV-IND.INTR.1SG
 「わたしは一度も水を見たことがない」

2.5 否定接語が非標準的な位置に現れる場合

否定接語は、次の2 つの場合³に動詞直前以外の位置に現れる。どちらの場合にも、否定

² コンサルタントによると、否定接語の位置を変えても大きな意味の違いは感じられないとのことであった。

³ Maslova (2003: 493) に、否定接語が副詞 *juuke* 「遠くに・で」、*iit'~iit'ie* 「長い間」の前に現れ、反意語を作ることがあるとの指摘がある：*el=juuke~ejuuke* 「近くに・で」、*el=iit'ie* 「少しの間」。この用法が生産的であれば、3 つめのタイプと考えることができるだろう。

(9) 名詞項が否定の焦点である場合

(10) 「否定接語＋名詞 (N)」で全体として副詞句として働き、Nの欠如が表される場合

なお、(10)のようなNの欠如を表す用法が可能なのは、Nが **possession cline** (Tsunoda 1995) の上で身体名称・属性・衣服を表す場合、つまり、典型的な譲渡不可能所有を表す場合に限られるようである。

コリマ・ユカギール語の平叙文では、動詞は直説法の人称語尾をとる。直説法の人称語尾は主語の人称・数に一致し、自動詞と他動詞で異なるパラダイムをなす。この言語では、直説法で自・他どちらの人称語尾をとるかということと、目的語をとり得るか否かということによって、ある動詞(動詞語幹)が自動詞なのか他動詞なのかが判断されるのである。

(11) a. *met tude kiejie gon-d'e.*

「わたしはかれの前を行った」

b. *met gon-din l'e-lle el=gon-d'e.* = (1)

「わたしは行こうとしていたが、行かなかった」

18

- (12) a. *met tōwke inji.*
 1SG 犬 怖がる:IND.TR.1SG
 「わたしは犬が怖い」
- b. *aa met oozii el=inji-je.*
 INTJ 1SG 水 NEG=怖がる-IND.INTR.1SG
 「ああ、わたしは水は怖くない」

また、否定では主語が3人称であれば人称語尾が現れないことが多い⁵。これは、否定接語の添加により動詞形態上の自他の対立が解消されたのち、さらに、自動詞3人称の語尾が脱落したものと分析できる。自動詞文(13b)においても、他動詞文(14b)においても、人称語尾が現れていないことに注目されたい。

- (13) a. *tudel oozii-ge t'ande qon-i.*
 3SG 水-LOC 上へ 行く-IND.INTR.3
 「かれは川を上流へ行った」
- b. *tii l'e-j, n'e=qanjide el=qon.*
 ここに いる-IND.INTR.3 CLT=どこへ NEG=行く
 「(かれは) ここにいる、どこへも行っていない」 (Nikolaeva 1989(I): 100)

- (14) a. *tude jouje-gele taat juo-m.*
 3SG:GEN 網-ACC そして 見る-IND.TR.3
 「(かれは) 自分の網を見た」 (Nikolaeva 1989(I): 80)
- b. *tudel terike mozuu nugen-dee-jle el=juo, el=moj.*
 3SG 妻 PRSP 手-POSS.3-ACC NEG=見る NEG=持つ
 「かれは妻となるはずの者の手を見たことも握ったこともなかった」
 (Nikolaeva 1989(I): 22)

動詞形態上の自他の対立の解消は、否定のスコープに動詞が含まれなければ起こらない。次の例のように、否定接語が非標準的な位置に現れた場合には、肯定文と同じように自動詞と他動詞の人称語尾が区別される。(15a)は自動詞文、(15b)は他動詞文の例である。

- (15) a. *d'e taat ... oj-d'-aa-d'elle, el=a3uu kude-j.*
 INTJ そして 吠える-DETR-INCH-CVB.SEQ NEG=声 なる-IND.INTR.3
 「(その犬は) 吠え始めて、声なしになった (= 静かになった)」
 (Nikolaeva 1989(II): 44)

⁵ 資料中には下の例のように、否定で自動詞3人称の語尾が現れた例がごくわずかに見られる。

- (I) *foromo-le el=juo-j.* 「(かれは) 人が見えなかった」
 人-INS NEG=見る-IND.INTR.3

b. *met-kele kudede-m, el=and'e nugede-m!*

1SG-ACC 殺す-IND.TR.3 NEG=目 する-IND.TR.3

「(かれは) わたしを殺した、目なしにした (= 目を見えなくした)」

(Nikolaeva 1989(I): 100)

Hopper & Thompson (1980) の他動性の研究において、肯否 (affirmation) は他動性に影響を与えるパラメータのひとつであり、否定は肯定よりも他動性が低いとされている。その具体例として挙げられているのは、ロシア語の属格目的語、フィンランド語の分格目的語、フランス語の前置詞付き無冠詞目的語のような否定文における目的語の格の交替である。風間 (1997) は、ツングース諸語のエウエンキー語の否定文でも対格に代わって不定対格が用いられることを指摘している。これらの言語では他動性の低下が目的語を不定名詞 (または非「定名詞」) として示すことに反映されている。上記のコリマ・ユカギール語の否定文における人称語尾の自動詞化も、否定が他動性を低下させることの反映と考えることができる。ただし、コリマ・ユカギール語では、肯否の他動性への影響はあくまで動詞の形態に現れるのであって、名詞項の格標示は肯定文と否定文で同じパターンを示す⁶。Miestamo (2005: 134-135, 138) は、否定が自他の対立を解消するコリマ・ユカギール語のようなタイプの言語は通言語的に非常に珍しいと述べている⁷。

4 推量接辞の添加に伴う自他の対立の解消

人称語尾の自動詞化は、動詞に推量 (inferential) の接辞 *-l'el* が添加された際にも起こる。ただし、推量接辞の添加に伴う自動詞化には人称制限があり、主語が 1 人称の場合に限られる。この推量接辞は基本的には証拠性に関わる機能を持ち、文の表す情報が話し手の直接体験ではなく何らかの痕跡や伝聞により得られたことを示すものであるが、話し手自身の行為の描写に用いられたときには、その行為が意図せずに行われたということを表す (Maslova 2003a, 2003b)。つまり、行為が非意図的であることが自動詞化の要因となっていると考えることができる。Hopper & Thompson (1980) の議論では、意図性 (volitionality) も他動性に影響を与えるパラメータのひとつとされており、非意図的な行為は意図的な行

⁶ コリマ・ユカギール語の目的語の格は、主語と目的語の人称の組み合わせなどにより複数の選択肢がある。たとえば、主語が 1・2 人称で目的語が 3 人称であれば、目的語は主格で現れ、主語も目的語も 1・2 人称であれば、目的語は対格 *-ul* をとって現れ、主語が 3 人称であれば目的語は対格 *-gele* または具格 *-le* をとって現れる。詳しくは、Krejnovich (1982), Maslova (2003), 長崎 (2014) を参照されたい。

⁷ 風間 (1997) はまた、否定を一種の不完了の動作としてとらえることにより、フィンランド語の分格あるいはエウエンキー語の不定対格のアスペクト的な用法とのつながりを説明することができると述べている。ユカギール語の否定文における人称語尾の自動詞化は共時的にはあくまで他動性の問題と考えるを得ない。自動詞の人称語尾に特定のアスペクトを表す用法は認められないからである。しかし、風間 (1997) の指摘は、ウラル諸語の一部に見られる不定活用・主語活用 (indefinite, subjective conjugation) と定活用・目的語活用 (definite, objective conjugation) のような対立がユカギール語にもあり、それが自動詞活用と他動詞活用の対立へ発展したという通時的な変化を示唆する。ウラル諸語の中でも、不定活用・主語活用と定活用・目的語活用が対立するハンガリー語、ハンティ語、マンシ語、ネネツ語、ガナサン語、セリクブ語などでは、自動詞は常に不定活用・主語活用し、他動詞は目的語の不定・定に合せて不定活用・主語活用したり定活用・目的語活用したりする (Honti 1998, Abondolo 1998, Keresztes 1998, Salminen 1998, Helimski 1998a, Helimski 1998b)。

為よりも他動性が低いとされる。

(16) a. *terike, irkin t'omoolben kudedede.*

妻 1つの オオシカ 殺す:IND.TR.1SG

「妻よ、(わたしは) オオシカを 1頭殺したぞ」

b. *oo met terikie, mon-i, kimdaan'e-t kudedie-l'el-d'e.*

INTJ 1SG 妻 言う-IND.INTR.3 騙す-CVB 殺す-INFR-IND.INTR.1SG

「ああ、(わたしは) 自分の妻を—(かれは) 言った—間違って殺してしまった」

また、推量接辞の添加の際には(17)に見るように、否定と同様に自動詞 3 人称の語尾の脱落も生じる。(18)に見るように、主語が 1 人称でない場合には、(他動詞の) 自動詞化は起こらないことに注意されたい。

(17) *tudel oozii-ŋin gol-l'el.*

3SG 水-DAT 行く-INFR

「かのじょは水汲みに行ったそうだ」

(18) *alandin kereke-gele t'okojo-le kudedie-l'el-u-m.*

アランディン コリヤーク-ACC ナイフ-INS 殺す-INFR-E-IND.TR.3

「アランディンはコリヤークをナイフで殺したそうだ」(Nikolaeva 1989(II): 36)

ここまでで、推量接辞が、主語が 1 人称の場合に人称語尾の自動詞化を引き起こすこと、また、自動詞 3 人称の語尾の脱落を引き起こすことを見た。このように推量接辞と否定接語は、その添加に伴って生じる人称語尾の現れ方が部分的に共通している。そこで、両者が共起する際にはどちらの影響を受けて人称語尾が現れるのか、という疑問が生じるが、この点については、否定接語による影響が推量接辞による影響よりも優先されていると考えられる。その根拠は、主語が 2 人称あるいは 3 人称の場合に人称語尾の自動詞化が必ず起こることにある。(19)は主語が 2 人称の他動詞文であるが、動詞は自動詞の人称語尾をとっている。(20)は主語が 3 人称の他動詞文であるが、動詞の人称語尾は脱落している。いずれも推量接辞ではなく、否定接語の影響が人称語尾に現れている。

(19) *mit lebie-gə tət-in tudaa mət mon-mə=bən tət*

1PL 土地-LOC 2SG-DAT かつて 1SG 言う-ME.1SG=BN 2SG

əl=t'emerej-l'əl-d'ək.

NEG=終わる-INFR-IND.INTR.2SG

「わたしたちの土地で、お前にかつてわたしが言い付けたことをお前はやり終えていない」(Nikolaeva 1997: 35)

(20) *taŋ pajpe-gele el=kudedie-l'el.*

その 女-ACC NEG=殺す-INFR

「(クマは) その女を殺さなかった」(Nikolaeva 1989(II): 46)

異なる文法範疇間の依存関係について、Aikhenvald & Dixon (1998) は「(I) 節に関連する範疇 > (II) 述語に関連する範疇 > (III) 項に関連する範疇」のような階層を想定しており、肯定は(I)、証拠性は(II)に位置づけられている。つまり、一般的に否定は証拠性よりも階層上の上位に位置する傾向があるとされている。コリマ・ユカギール語における人称語尾の自動詞化に、否定と推量のうち前者の影響が優先される現象は、この階層の妥当性を示すものである。

5 まとめ

- (1) コリマ・ユカギール語の否定接語 *el=* は否定構造において一貫して用いられる。その生起位置は基本的には動詞直前であるが、否定のスコープに入るのが動詞以外の文構成素に限られる場合、その文構成素の直前に現れることもある。
- (2) 平叙文の肯定と否定は非対称である。肯定では動詞の人称語尾に自動詞と他動詞の対立があるが、否定ではその対立が解消され、常に自動詞の人称語尾が現れる。つまり、コリマ・ユカギール語には、否定が他動性と強く結びついているという特質が認められる。
- (3) 主語が1人称のときのみという制限があるが、動詞に推量接辞が添加された際にも、自動詞と他動詞の人称語尾における対立の解消が生じる。推量接辞は主語が1人称のときには、行為が意図せずに行われたことを表すことから、非意図性も否定と同様に他動性と結びついていると見なすことができる。
- (4) 否定接語と推量接辞が共起した際には、否定接語による人称語尾への影響が優先する。このことから考えて、コリマ・ユカギール語の否定は動詞の文法範疇の中でも上位に位置づけられていると言える。

略号一覧

1,2,3: 人称	CVB: 副動詞	FUT: 未来
ACC: 対格	DAT: 与格	GEN: 属格
BN: 拘束名詞	DETR: 自動詞化	HBT: 習慣
CAUS: 使役	DIM: 指小	IDEF: 不定
CLT: クリティック	E: 挿入音	IMP: 命令法
COND: 条件	ESS: 様格	INCH: 起動
COP: コピュラ	FOC: 焦点	IND: 直説法

INFR: 推量	LOC: 位格	PRSP: 予期
INS: 具格	ME: 分詞 ME 形	PURP: 目的
INTERR: 疑問法	NEG: 否定	Rus.: ロシア語の要素
INTJ: 間投詞	NMLZ: 名詞化	SEQ: 継起
INTR: 自動詞	PL: 複数	SG: 単数
IPFV: 不完了	POSS: 所有者	TR: 他動詞
JE: 分詞 JE 形	PRED: 述語	
L: 分詞 L 形	PROH: 禁止	

参考文献

- Abondolo, Daniel. 1998. Khanty. In: Daniel Abondolo (ed.) *The Uralic Languages*, 358-386. London & New York: Routledge.
- Aikhenvald, Alexandra Y. & R.M.W. Dixon. 1998. Dependencies between grammatical systems. *Language* 74(1), 56-80.
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- 遠藤史. 2005. 『コリマ・ユカギール語の輪郭—フィールドから見る構造と類型』三恵社.
- Honti, László. 1998. Ob Ugrian. In: Daniel Abondolo (ed.) *The Uralic Languages*, 327-357. London & New York: Routledge.
- Hopper, Paul & Sandra Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56, 251-299.
- Jochelson, Waldemar. 1905. Essay on the grammar of the Yukaghir language. *American Anthropologist*, new series 7(2), 369-424.
- 風間伸次郎. 1997. 「ツングース諸語における「部分格」」, 宮岡伯人・津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』第3号, 103-120. 京都大学大学院文学研究科.
- Helimski, Eugene. 1998a. Nganasan. In: Daniel Abondolo (ed.) *The Uralic Languages*, 480-515. London & New York: Routledge.
- . 1998b. Selkup. In: Daniel Abondolo (ed.) *The Uralic Languages*, 548-579. London & New York: Routledge.
- Keresztes, László. 1998. Mansi. In: Daniel Abondolo (ed.) *The Uralic Languages*, 387-427. London & New York: Routledge.
- Krejnovich, E.A. 1979. Jukagirskij jazyk. *Jazyki Azii i Afriki* III, 348-369. Moscow: Nauka.
- . 1982. *Issledovonija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Maslova, Elena. 2003a. *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin & New York, Mouton de Gruyter.
- . 2003b. Evidentiality in Yukaghir. In: Alexandra Y. Aikhenvald & R.M.W. Dixon (eds.) *Studies in Evidentiality*, 219-235. John Benjamins.
- Miestamo, Matti. 2005. *Standard Negation: The Negation of Declarative Verbal Main Clauses in a Typological Perspective*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

- . 2007. Negation: an overview of typological research. *Language and Linguistics Compass*, 1/5, 552-570.
- 長崎郁. 2014. 「コリマ・ユカギール語における名詞項標示」, 『北方言語研究』第4号, 19-31. 北海道大学大学院文学研究科.
- Nikolaeva, Irina. (ed.) 1989. *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, I-II. Yakutsk: Yakut State University Press.
- . (ed.) 1997. *Yukaghir texts*. Specimina Sibirica 13. Szombathely, Savariae.
- Payne, John R. 1985. Negation. In: T. Shopen. (ed.) *Language typology and syntactic description*, Vol. I, *Clause structure*, 197-242. Cambridge: Cambridge University Press.
- Salminen, Tapani. 1998. Nenets. In: Daniel Abondolo (ed.) *The Uralic Languages*, 516-547. London & New York: Routledge.
- Tsunoda, Tasaku. 1995. The possession cline in Japanese and other languages. In: H. Chappell and W. McGregor (eds.) *The Grammar of Inalienability: a Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation*, 566-630. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Negation and Transitivity in Kolyma Yukaghir

Iku NAGASAKI

(National Institute for Japanese Language and Linguistics)

This paper focuses on Kolyma Yukaghir negative constructions. In this language, the proclitic *el=* is used as the negative marker in most negative constructions. This negative proclitic usually appears directly before the verb, although it can also appear before the other constituents when the negation does not scope over the verb. A notable characteristic of Kolyma Yukaghir is paradigmatic asymmetry between affirmation and negation in declarative sentences, as discussed in Miestamo (2005) based on the grammatical description of Maslova (2003): the distinction between the intransitive and transitive agreement markers is lost in the negative, and only the intransitive markers are used. In this paper, I discuss the fact that the same paradigmatic asymmetry is observed when the verb is marked by the inferential suffix *-l'el* with the first person subject, which indicates a non-volitional action. I also discuss the fact that the negative takes priority over the inferential in the choice of agreement markers: when they co-occur, intransitive markers are always used.

(ながさき・いく inaga@ninjal.ac.jp)